文化人類学講座20周年記念特集にあたって

京都大学大学院人間・環境学研究科に文化人類学分野が1993年に設置されて20年が経つ。これを記念して、2013年4月から京都人類学研究会で5回にわたって記念行事を開催した。4月から6月の例会は、現役の教員による連続記念講演会とし、7月の季節例会は分野出身の研究者による記念シンポジウムに当てた。さらに6月にはもうひとつシンポジウムを開催した。以下がプログラムである。

文化人類学講座20周年記念講演会＋シンポジウム
4月26日　菅原和孝「身体化の人類学から身ぶり論まで」
　コメンテーター　佐藤友久（京都文教大学）
5月24日　田中雅一「SEX × 感情労働 × 官能労働――」
　コメンテーター　茶園敏美（姫路医療センター付属看護学校）
6月22日　シンポジウム「民俗芸能の実践と継承――「西浦の田楽」を舞う」
　守屋治次（「西浦の田楽」保存会会長）「田楽を舞って45年」
　菅原和孝「若い衆の実践――練習場面における身体技法の獲得」
　コメンテーター　藤田隆則（京都市立芸術大学）・細馬宏通（滋賀県立大学）
6月25日　風間計博「バナバ人とは誰か――強制移住の記憶と怒りの集合的表出」
　コメンテーター　西井涼子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）
7月19日　シンポジウム「アニマと〈あいだ〉の人類学」
　中谷和人「芸術と生の人類学へ――障害のある人たちの創作活動から」
　松嶋健「脱制度化の源としての〈触発＝情動〉の連鎖の場――精神医療における「魂に対する態度」がもたらすもの」
　石井美保「パッションの共同体へ――南インドにお ける神霊憑依、開発、身体」
　コメンテーター　野村雅一（国立民族学博物館名誉教授）

このプログラムからも明らかなように、菅原、田中、風間が記念講演会を行い、菅原と石井がそれぞれ6月と7月のシンポジウムを組織した。本誌には３つの記念講演と石井の発表に基づく論文が収められている。本誌は、だれでも投稿可能な学術雑誌であるが、本号から編集と出版母体が京都大学人文科学研究所・人文学国際研究センターから文化人類学分野に移行したのを機に、20周年に関わる行事の掲載を行うことに決めた。

＊

京都大学大学院人間・環境学研究科（以下人環）文化人類学講座（後に分野）は、1992年に始まる旧教養部の改組、総合人間学部と独立大学院人間・環境学研究科の設置の流れの中で生まれた。京都大学は、戦前から今西錦司による強力なリーダーシップのもと独自

の人類学を発展させ、多くの優秀な人材を輩出してきた。南洋諸島のポナペ、大興安嶺、内蒙古、戦後はアフリカ調査、南西アジアや東南アジア、そしてヨーロッパなどでの調査を実施し、良質のモノグラフを出版してきた。しかし、制度的には、人文科学研究所に今西、梅棹、谷泰らが担当していた社会人類学部門（田中は国立民族学博物館から 1988 年に転任）、教養部に米山俊直（菅原は北海道大学から 1988 年に転任）の文化人類学研究室があっただけで、大学院教育は文学部、理学部や農学部などの一部で行われていたにすぎない。1970 年代の日本で文化人類学の大学院教育が整備されていたのは、東京大学、東京都立大学（現首都大学東京）、南山大学くらいであった。その後、各地の大学に文化人類学を学ぶことのできる大学院が設置されることになるが、京都大学において大学院教育が整備されるのは 1993 年になってのことである。それまで、京都大学では、主として梅棹の主導のもと京都大学人類学研究会が組織され近衛ロンドが毎週開催されていた。これが実質的な教育機関であった。そして、同会の機関誌として『季刊人類学』が 1970 年に発刊された（1990 年に 80 号をもって廃刊）。

人環の初期の教員は、当時総合人間学部で教鞭をとっていた米山と菅原、1992 年に国立民族学博物館から総合人間学部に転任した福井勝義、人文科学研究所の谷と田中の 5 人が、新設の大学院に協力講座の教員として参加するという形を取っていた。1993 年に進学した学生は 5 人であったから、1 人の教員につき 1 人の学生というたいへん贅沢な学習状況であった。1994 年に米山が退職、その 3 年後に谷が退職し、一時福井、菅原、田中の 3 名による教育体制が確立するが、2003 年福井と菅原の大学院移籍に伴い、別分野に所属していた山田孝子が文化人類学分野に移籍する。こうして福井、菅原、山田、田中の 4 人体制が生まれる。2007 年に福井、2012 年に山田が退職、代わって風間計博が筑波大学から転任、2013 年から人文研の石井美保が協力教員となり、現在は菅原、風間、田中、石井の 4 人、2015 年 4 月には、退職する菅原の後任に広島大学から岩谷彩子を迎える。助教には、2005 年から 10 年まで松村圭一郎（現在立教大学）が、その後金子守恵が就任している。過去 20 年間に修士論文を提出した学生の数はおよそ 100 人にのぼる。博士号取得者はその 3 分の 1 にあたるおよそ 30 人である。

人環の文化人類学で教育を担当するスタッフは 4 人にすぎない。その中で 20 年間関わってきたのは菅原と田中だけである。われわれ 2 人がゼミや論文執筆を通じて学生に要求してきたのは、フィールドワークによるオリジナルな資料収集の徹底と、文化人類学理論への批判的な貢献という二つであった。それは、しばしば学生にとってはダブルバインドのような無理な要求だったかもしれないが、人類学の生命線はこれしかないということがわれわれの共通認識であった。本特集においても、そのような知的潮流に触れてもらうことができれば幸いである。

＊　　＊

菅原の退職に伴い、米山、谷、福井、山田ら、学生時代から今西、梅棹、伊谷純一郎らが築いてきた京都大学人類学の「正統的周辺参加」を経験してきた者はいなくなると考え

ていいだろう。それは、残念なことではあるが、伝統が断絶したというわけではない。たとえば、大学院の設置に伴って、近衛ロンドは現在の京都人類学研究会として 1996 年に生まれ変わった。後者は京都大学だけでなく、京都在住あるいは京都の大学に勤務する人類学者や学生を対象とする研究会である。また、本誌も、発行拠点を人環の文化人類学分野に移したのを契機に、かつての『季刊人類学』のように京都人類学研究会とより緊密な連携を取っていく予定である。具体的には、同研究会で開催されたシンポジウムなどの掲載を積極的に行っていく。本特集は、そのような試みの第一弾である。ご笑覧いただければ幸いである。

田中 雅一